

保幼小の連携教育のカリキュラム作成に関する研究

香美市立舟入小学校 教諭 押川 朝子
高知県教育センター チーフ 尾中 映里

平成 22 年度教育センター研究生の研究で明らかになった課題として、児童の学びや育ちの連続性を確保するために、学校や児童の実態に合ったスタートカリキュラムと互惠性のある交流の取組を年間指導計画に位置付けるとともに、教職員全体で共通理解を図り、継続していくことが挙げられた。

そこで、本研究では、年間指導計画の中にコミュニケーション力を身に付けることに重点を置いたスタートカリキュラムや幼児との交流を位置付け、その全時間において検証授業を実施し、児童の変容等から分析を行った。また、教職員や保育士等へのアンケート調査も実施し、連携教育の実態を明らかにして、分析を行った。これらの取組を検証した結果、保幼小の円滑な接続の在り方について効果が認められた。

キーワード：保幼小連携、スタートカリキュラム、幼児との交流、年間指導計画、コミュニケーション力

1 研究の目的

小学校学習指導要領解説生活編では、「幼児教育から小学校教育への円滑な接続を図る観点から、入学当初においては、生活科を核とした合科的な単元を構成したり、新一年生の体験入学の際に、児童が幼児と交流する学習活動を設定したりすることも考えられる。その際は、幼稚園や保育所などとの連携や全校的な協力体制をとれるようにすることが大切である」と明記されている。一方、保育所・幼稚園においても、小学校と連携を図ることの大切さが示されている。保育所保育指針や幼稚園教育要領では、幼児教育と小学校教育の円滑な接続のために、幼児と児童の交流、職員間の交流、合同研究など具体的な内容を挙げている。保育所・幼稚園と小学校が連携することで、「これらの活動を通じ、学校全体が活性化するとともに、児童が幅広い体験を得、視野を広げることにより、豊かな人間形成を図っていくことが期待される」と述べられている。(小学校学習指導要領解説総則編)

高知県の子どもたちの実態を見ると、小学校では、平成 22 年度全国学力・学習状況の調査の結果、小学校では、国語・算数ともに改善し正答率が全国水準となっているが、学年が上がるにつれて学力が二極化してきていることが挙げられる。体力についても高知県の教育課題の一つとなっており、平成 22 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果では、男女共に全国平均を下回っている。学力については、学習に対する関心・意欲・態度との相関関係も指摘されており、学力の基礎を培う幼児期から小学校入門期に、主体的に学び、意欲的に学習に取り組む姿勢を育てることは重要である。このことに関して、平成 22 年度教育センター研究生の研究で明らかになった課題として、児童の学びや育ちの連続性を確保するために、学校や児童の実態に合ったスタートカリキュラムと互惠性のある交流の取組を年間指導計画に位置付けるとともに、教職員全体で共通理解を図り、継続していくことが挙げられた。

そこで、本研究では、保幼小の連携教育を全教職員が共通認識をもって取り組んでいくことができるよう学校や児童の実態に合ったスタートカリキュラムや幼児との交流を年間指導計画の中に位置付け、継続的に実施するようにした。そうすることで児童の連続した育ちの改善につながると考え、検証授業から児童や教師の変容を考察した。

2 研究仮説

早い段階から、幼児との交流活動を年間指導計画に位置付け、実施するとともに、入学後からは第1学年のスタートカリキュラムを実施することで、教職員にも連携に対する意識が生まれ、円滑な保幼小の接続を図ることができる。

3 研究内容

(1) 基礎研究

ア 小学校学習指導要領、保育所保育指針、幼稚園教育要領の整理

小学校学習指導要領総則では、「幼児教育の連携の観点から工夫が望まれる」としており、今回の生活科の改訂で連携を一層推進することが改めて重要であるとしている。さらに、平成21年施行の保育所保育指針や幼稚園教育要領でも小学校との連携を図ることが新たに示されている。

小学校学習指導要領解説生活編	保育所保育指針	幼稚園教育要領
低学年の <u>児童が幼児と一緒に学習活動を行うこと</u> などの配慮をすることが求められている。また、 <u>教師の相互交流</u> を通じて、指導内容や指導方法について <u>相互理解</u> を深める重要性が指摘されていることから改めて近隣の幼稚園や保育所など、 <u>幼児教育に携わる人々と交流</u> をし、協力体制作りに努める必要がある。	子どもの生活や発達の連続性を踏まえ、保育の内容の工夫を図るとともに、就学に向けて、 <u>保育所の子どもと小学校の児童との交流、職員同士の交流、情報共有や相互理解</u> など小学校との積極的な連携を図るよう配慮すること。	幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続のため、 <u>幼児と児童の交流の機会</u> を設けたり、 <u>小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会</u> を設けたりするなど、連携を図るようにすること。

イ 平成22年度高知県教育センター研究生の研究の成果と課題

昨年度の研究では、第1学年入学当初に合科的な指導を行うスタートカリキュラムを52時間作成し、そのうちの1つの小单元（5時間）を検証した。検証の結果、小学校生活にスムーズに適応しにくいと思われる児童だけではなく、すべての児童により良い成長が見られた。また、高知県下の6市町村で保育所・幼稚園と小学校との交流についてのアンケートを実施し、高知県での交流についての現状を把握して、保育所・幼稚園と小学校の双方が学び合える互惠性のある交流活動を計画し、検証した。その結果、児童一人一人が自分の良さを発揮でき、そのことから児童の新たな面も見られ、教師の児童理解につながった。

今後の課題として、スタートカリキュラムの全時間の検証を行い、スタートカリキュラムと互惠性のある幼児との交流活動を年間指導計画に位置付け実施していくことや、保幼小との連携教育の重要性を教職員全体で共通認識し、取り組んでいくことが挙げられた。

ウ スタートカリキュラムの整理

(ア) スタートカリキュラムを作成した視点を次のように整理した。

- ① 単元の目標やねらいと教科の目標や内容を関連させて設定している
- ② 楽しみながら学習したり、先生や友達とかかわりながら学習したりできる内容にしている
- ③ 生活科と他教科の組み合わせだけではなく、生活科以外の教科の組み合わせを設定している
- ④ 幼児教育で学んできたことを基にした遊びの要素を含んだ活動が中心になっている
- ⑤ 45分の授業の内容がつながっている(テーマをもたせる)
- ⑥ 全ての活動に関心・意欲・態度の評価を設定している

(イ) 内容構成の整理

スタートカリキュラムに含まれている内容について他の内容と関連を図りながら実施できるよう一覧表に整理した。[別紙資料1参照]

関連	内容	項目
第1学年で従来指導してきたもの	自己紹介、施設の使い方、持ち物の整頓の仕方、掃除、給食、並び方	A-1、3、4・B-4・C-1、2、3・D-1・E-1、2、3・G-3
幼児教育とのつながりが深いものや今まで経験してきたもの	歌、リズム遊び、施設の使い方、読み聞かせ、遊具遊び、給食、掃除、草花遊び、並び方、制作	B-1、2、3、4、5・C-1、2、3・D-1・E-1、2、3・G-1、3・H1、2・I-1、2・J-1、2、3、4
指導体制を工夫したもの	校長、教頭、養護教諭、事務職員、用務員、2年担任、6年担任、ボランティア	A-2、3・C-1・D-1、3・E-3・F-2・H-3・K-3
活動スペースを工夫したもの	広いスペース、体育館、校庭、図書室、学校内	A-2、3・B-1、2、3、4、5・C-1、2、3・D-1、3、4・E-2・F-2、3、4・G-2、3・H-1、2、3・I-1・J-1、2、3・K-3
指導形態を工夫したもの	ペア、グループ、課題別	B-2、3・D-1、2、3、4・F-2、3、4・K-1

(2) 調査研究

ア 入学前後の児童の実態や保幼小の交流活動に関するアンケート調査・結果分析

B市において入学前後の児童の実態や保育所・幼稚園と小学校との交流活動の実態を把握するため、保育士・幼稚園教諭と小学校教諭に対してアンケート調査を実施した。昨年度の研究では、高知県下6市町村で実施している。そこでは、保育士・幼稚園教諭169名、小学校教諭128名から回答を得ており、それを高知県の指標することとし、B市の結果と比較分析をした。

(ア) 調査対象と回答

B市内の平成22年度・23年度に年長児を担当した経験のある保育士・幼稚園教諭 10名

B市内の平成22年度・23年度に1年生を担当した経験のある小学校教諭 17名

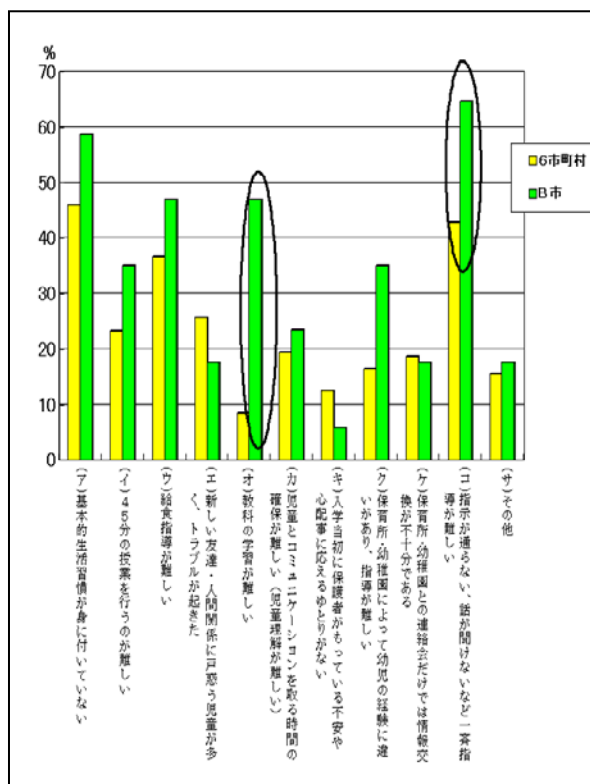
(イ) 実施日

平成23年9月

(ウ) 調査結果

a コミュニケーション力について

「1年生を担当されて、入学当初から1学期の終わり頃まで、学級や児童の様子で気になったことや指導上困ったことがありますか」(小学校教諭対象)との質問に対してB市で最も多かったのは、64.7%(11名)の「指示が通らない、話が聞けないなど一斉指導が難しい」である。(昨年度は42.9%で55名)。その回答をした11名のうちの7名は3番目に多かった「教科の学習が難しい」も挙げている。(全体では8名の47%) [グラフ1]



グラフ1 学級や児童の様子で気になったことや指導上困ったこと

「小学校入学前に幼児にどのような力を付けておいて欲しいと保育所・幼稚園の先生に望みますか」(記述式)との質問に対して人とのかかわりに関することを記述をしていたのは、B市で80%(14名)いる。昨年度は64%(52名)であった。

一方、「小学校に入学するまでに、保育所・幼稚園ではどのようなことを目標に幼児を育てていますか」(保育士・幼稚園教諭対象)の質問に対して、人とのかかわりに関する項目の「自分の思いや願いを出せる」(B市は100%の10名、昨年度は98.2%の166名)と「人の話が聞ける」(B市は90%の9名、昨年度は98.2%の166名)は、多くの保育所・幼稚園が目標に挙げている。[グラフ2]

これらのことから、小学校では、保育所・幼稚園でコミュニケーション力をつけて欲しいと考えており、保育所・幼稚園では、コミュニケーション力をつける保育をしていることが分かる。

b 幼児との交流について

B市では全ての小学校で幼児との交流が行われていることが分かった。交流内容は、多くの小学校が、1年生と年長児が1日入学で昔遊びやゲーム活動等を行うことを挙げている。

「交流活動を実践して良かったことはどんなことですか」(保育士・幼稚園教諭、小学校教諭対象)の質問に対して、保育士・幼稚園教諭では、学校の雰囲気が味わえたり、異年齢とかかわりをもつことの大切さを挙げている。小学校教諭では、1年生の成長や思いやりが育つことが挙げられている。しかし、未記入のアンケートもあり、その原因として子どもたちのよさや変容が見られていないと思われることから、未記入者の数を調査した。B市での未記入者は、保育士・幼稚園教諭で50%(5名)、小学校教諭で23.5%(4名)となっている。昨年度は、保育士・幼稚園教諭で19%(31名)、小学校教諭で17%(23名)なので未記入者が多いことが分かる。

希望する交流時期として、「年中児の実態に合わせて適宜」としているのは昨年度は24.3%(41名)だが、B市では、10%(1名)である。さらに、希望する交流内容として、「保育所・幼稚園で経験したことのある遊びを取り入れたもの」は、昨年度は半数以上の66.3%(112名)だが、B市では30%(3名)となっている。B市での交流は小学校中心になっていることが分かる。

イ 教職員に対する保幼小の連携教育に関するアンケート調査・結果

昨年度の研究で、保育所・幼稚園との連携についての意識を1年生担任だけでなく全教職員がもつことが課題として挙げた。そこで今年度、連携に対する教職員の意識を調査するため、A小学校の教職員に対して保幼小の連携教育についてのアンケート調査を実施した。

(ア) 調査対象と回答

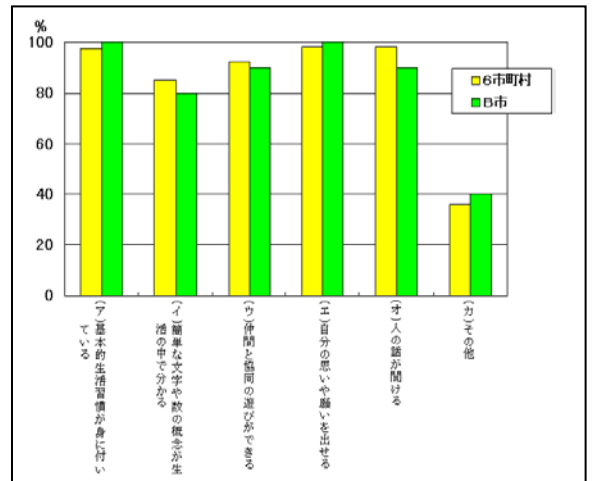
A小学校教職員11名(教諭8名、養護教諭1名、事務職員1名、講師1名)

(イ) 実施日

1回目 平成23年11月2日 2回目 平成24年1月20日

コミュニケーションに関する記述

- ・自分の思い(困ったことなど)をしっかりと言葉にできる。
- ・困ったことがあれば、自分の口で伝えることができること。
- ・トラブルがあったとき素直に「ごめんなさい」が言える。
- ・言葉遣い(友達の呼び方、乱暴な言い方など)。
- ・呼びきりではなくて丁寧な言葉遣いをしてほしい。

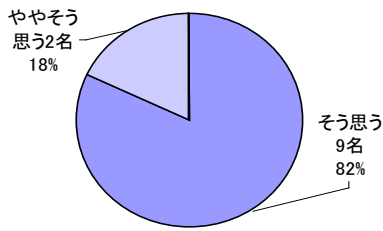


グラフ2 保育所・幼稚園の目標

(ウ) 調査結果

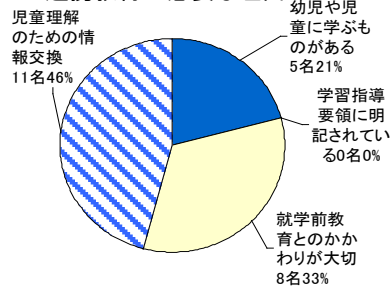
a 連携教育について

連携教育をすることは必要か



グラフ3 連携教育の必要性

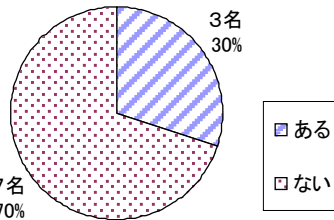
連携教育が必要な理由



グラフ4 連携教育が必要な理由

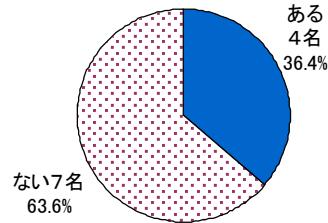
b 今までの交流活動について

研究指定校、連携教育を
実践している学校に
勤務したことがあるか



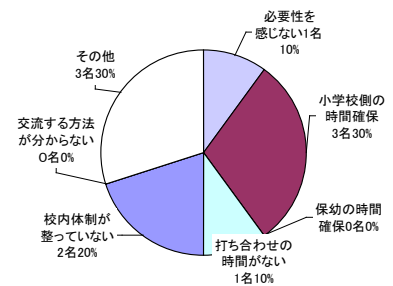
グラフ5 実践校での経験有無

A小学校で交流を
計画したことはあるか



グラフ6 交流計画の有無

計画しなかった理由(複数回答可)



グラフ7 計画しない理由

(3) 実践研究

ア スタートカリキュラムの検証授業の実施(対象:A小学校第1学年16名)

全52時間のスタートカリキュラムの有効性を確かめるために、第1学年の入学式翌日4月8日から5月27日までの2か月間、検証授業を実施した(実質は学校行事のため50時間実施)。

(ア) 検証授業を行うに当たって

検証授業では、次の4点に重点を置き、実施するようにした。

第1に、児童が主体的に活動できるよう、教師が前で手本を示したり友達の様子を見て真似ることができるような声掛けをしたりして、児童が安心して活動を行えるような雰囲気作りを行う。

第2に、コミュニケーションを取りながら先生や友達とかわかっていることができるように、教師が児童らと一緒に活動をしたり、活動の中にペアやグループで活動をする形態を多く取り入れたりする。

第3に、体験を通して、気付いたことを大切にするために授業の最後には振り返り活動を取り入れ、体験を価値付け、次の活動が深まるようにする。

第4に、45分の授業の中にも導入、展開、まとめの授業の流れを取り入れ繰り返すことで、自然な形で授業の流れが身に付くようにする。

(イ) 授業の配列について

配列の方法として、新しい環境に児童が適応して学校生活を行っていく上で、優先的に身に付けさせたいことを絞り、週ごとにテーマを設け、取り組んだ。

第1週から第2週(4/8~4/15)では、小学校の施設の使い方や学校のきまりを知ったり、新しく出会った先生や友達のことを意識したりすることで学校生活に慣れることをねら

いとす授業配列にした。小学校に対して期待や不安を抱いて入学している児童が、安心して学校生活がスタートできるように、環境を整え、まずは慣れ親しむことに配慮した。

第3週（4/18～4/22）では、先生や友達との出会いを楽しむことをねらいとする授業配列とした。音楽や歌等で自分を表現する幼児教育の要素を多く含んでいる活動や、ゲーム活動で友達とかかわったりして十分に触れ合う活動を取り入れた。また、2年生と一緒に学校巡りを行い、他の学年と交流する時間も設定した。

第4週（4/25～4/29）では、新しい先生や友達に関心をもってかかわることができることをねらいとする授業配列とした。児童が主体的に活動できるように学校探検では、児童の思いも生かした授業展開とした。

第5週から第6週（5/2～5/13）では、これまでに体験したことを友達に広げ、共有することをねらいとする授業配列とした。児童は小学校の生活リズムに慣れてきた頃である。授業の流れも身に付いてきたので、教科の学習の時間を徐々に増やすようにし、スタートカリキュラムを実施しない日を設けた。

第7週（5/16～5/20）では、様々な活動を通して学級内の友達とさらに仲良くなり、意欲的に学校生活を送ることができることをねらいとする授業配列にした。6年生と交流したり、ペア学習やグループ学習を取り入れたたりして、友達と深くかかわる場面を多く取り入れた授業構成とした。

第8週（5/23～5/27）は、これまでのスタートカリキュラムの経験を生かして、主体的に活動できることをねらいとする授業配列とした。児童が、目標をもって学習に取り組んだり、自分や友達のよさにも気付いたりすることができる設定とした。スタートカリキュラムの最後の週になる。

4月					
				7 (木)	8 (金)
1					迎える会
2				入学式	A-1 自己紹介
3					E-1 ロッカー
4					
5					
	11 (月)	12 (火)	13 (水)	14 (木)	15 (金)
1	E-2 並び方	交通安全教室	遠足	A-4 カード	G-1 飾りつけ
2	身体測定	交通安全教室		A-4 カード	G-1 飾りつけ
3	E-3 給食	B-1 歌			
4	E-3 給食	A-2 ゲスト			
5					H-1 歌自己紹介
	18 (月)	19 (火)	20 (水)	21 (木)	22 (金)
1	B-2 歌さんぽ	B-3 かもつ列車	C-1 読み聞かせ	C-2 図書	D-1 2年生と探検
2	G-3 掃除	G-2 言葉探し	視力検査	B-4 道具	D-1 2年生と探検
3					
4					
5					
	25 (月)	26 (火)	27 (水)	28 (木)	29 (金)
1	C-3 図書	D-2 感想	D-3 グループで	D-4 カード	
2	I-1 草花	B-5 道具	D-3 グループで	D-4 カード	
3					
4					
5					

5月					
	2 (月)	3 (火)	4 (水)	5 (木)	6 (金)
1	I-2 花の絵				F-1 探検復習
2	I-2 花の絵				
3					
4					
5					
	9 (月)	10 (火)	11 (水)	12 (木)	13 (金)
1	F-2 グループ				F-4 言葉集め
2	F-2 グループ				H-2 おにごっこ
3		F-3 カード			
4		F-3 カード			
5					
	16 (月)	17 (火)	18 (水)	19 (木)	20 (金)
1	H-3 6年生と交流	J-1 動物の歌		J-2 ゲーム	J-3 じゃんけん
2					K-1 詩づくり
3					K-1 詩づくり
4					
5					
	23 (月)	24 (火)	25 (水)	26 (木)	27 (金)
1	J-4 動物の絵		K-2 集会	K-3 集会	K-4 手紙
2	J-4 動物の絵				K-4 手紙
3					
4					
5					

図1 4、5月スタートカリキュラムの時間割

(ウ) 実施校の実態に合わせて変更した項目について

昨年度の研究で作成したスタートカリキュラムを基本にして実施したが、検討をした結果、学校や児童の実態、担任のねらいや思いに合わせて変更した項目を挙げる。

項目	昨年度の内容	変更理由	変更箇所
A-3	1年生を迎える会を行う。	4月8日1時間目（入学式の翌日）に実施していたため	取り扱わなかった。
G-1	画用紙で好きな飾りを作り教室に飾る。	学級経営の中での担任の思いがあったため	画用紙で自分の顔を作り教室に飾る。
H-1	わらべ歌に親しむ。	既習活動を行い、保護者にスタートカリキュラムでの様子を見てもらうため	自己紹介や椅子取りゲームをする。
I-2	筆に絵の具を付けて花の絵を描く。	児童が個人用の絵の具を持っていないため	クレパスでお日さまを描く。
J-4	好きな動物を絵に表す。	紙を切ったりちぎったりすることは、G-1で行ったため	好きな動物を粘土で表す。
K-1	詩「あひるのあくび」の特徴を生かして詩を作る。	現段階の学習状況では、難しいため	詩「あいうえおのうた」の特徴を生かして詩を作る。
K-2	1年生なかよし集会をする。	1年生は単式学級のため	2年生となかよし集会をする。

(エ) 今後、改善が必要だと判断した項目について

検証授業を実施した結果、授業の配列に考慮する必要があると、児童の実態を見極め改善したりする課題があった項目を挙げる。

実施した時期が早すぎる

- ・「C-3」自分の読んだ本の題名や簡単な感想を紹介する活動では、まだ、ひらがなを読める児童が少ないので一人で本を読むことが難しかった。
- ・「K-4」学校探検で出会った人やお世話になった人に手紙を書く活動では、探検活動から間が開いており、忘れてしまっていて書くことに困る児童が多かった。また、手紙を書くことが初めてになるので十分な指導が必要であった。また、手紙の相手の対象者が幅広く、選ぶのに苦労している様子の児童が多く見られた。

活動にゆとりがない

- ・「B-4」固定遊具の使い方を知る活動では、次の遊具へ移動する時間がかかり、すべての遊具で遊んだり説明したりする時間がなかった。
- ・「F-4」学校の中にある言葉、文字、数、数字を探しに行く活動では、校内を歩いて探すのに時間を要したり、まだひらがなを書けない児童がいたりして45分の中で2つ、3つしか見つけることができないペアもあり、十分な活動に至らなかった。
- ・「G-3」掃除の仕方を知る活動では、内容が多く最後まで説明するに至らなかった。

経験に差がある

- ・「I-1」学校にある草花を見つけて遊ぶ活動では、草花遊びの方法を知らない児童が多く、遊びが広がらなかった。

説明する時間が長くなる

- ・「C-1」図書室の仕組みや利用の仕方を知る活動では、説明が長くなった。

日程の調節がうまくいかない

- ・「A-2」学校にいる先生方を知る活動では、他の行事と重なっており、時間の調節ができず先生と交流する時間がなかった。

(オ) スタートカリキュラムにおける合科的な学習プログラムの有効性について

a 有効性を検証するにあたって

スタートカリキュラムにおける合科的学習が児童の円滑な接続にとって有効なものであるかを児童の変容から考察を行った。検証方法は、ビデオカメラ、デジタルカメラを使って児童の行動や発言、つぶやきを観察したり、担任や他の教職員から聞き取り調査を行ったりして1週間ごとに記録し、考察を行った。16名全員の变容を記録し検証を行ったが、ここでは次のような児童を例として挙げる。

A児：小学校生活にスムーズに適応しにくいと思われる児童

B児：小学校生活におおむね適応すると思われる児童

C児：小学校生活にスムーズに適応すると思われる児童

b 児童の分析

	入学当初の様子	4/8～15	4/18～22	4/25～28	5/2～13	5/16～20	5/23～27
A児	あまりしゃべらない。周囲の状況を判断できない。	自己紹介では、恥ずかしがり、何も話さなかった。2人組を作る活動では、その場で立ったままだった。	3人組を作る活動では、Gに誘われたが、あと1人を見つけることができなかった。表現活動では、その場で立ったままだった。	本を紹介する活動では、「できない」と言い座り込んだ。遊具遊びの活動では、担任の励ましで運梯に挑戦し、1段目にぶら下がることができた。	絵を描く活動では、周りの様子を見て取りかかっていた。自分の考えた太陽を表現した。しっぽ取りゲームでは、走ることが得意な友達から紐を取りうれしそうにしていた。	6年生との交流会では、6年生が考えたクイズに自ら手を挙げ答えていた。友達に話す活動では、自ら友達に話しかけ好きな動物を質問していた。	手紙を書く活動では、自ら「6年生のDに書きたい」と決め、友達に手紙の書き方を教えてもらいながら書いた。
B児	同じ保育所から入学した友達としか話さない。	歌ったり体を動かしたりする活動では、体を動かさずじっと立ったまま歌っていた。	3人組を作る活動では、同じ保育所から入学してきた友達を見つけてグループになっていた。2年生との学校巡りでは、入学前から面識のある2年生と一緒に手をつないで歩いていた。	学校探検では、同じ保育所から入学してきた友達と3人で一緒に探検していた。	ペアを作る活動では、自分から相手を見つけ声をかけていた。学校探検では、友達に草花遊びの仕方を教えてもらいたい理由から決めていた探検場所を変更した。	歌う活動では、リズムにのって楽しそうに歌っていた。	朝の会では、身体を大きく動かしながら楽しそうに歌っていた。
C児	何事にも積極的に取り組み困っている友達にも声をかけることができる。	歌の活動では、身体を動かしながら楽しそうに歌っていた。	遊具遊びでは、高い所が上がったり、高い鉄棒に挑戦したりして意欲的に遊び方を見つけて遊んでいた。	学校探検の準備の活動では、探検のきまりを一人でいくつも挙げて発表していた。	グループを作る活動では、積極的に周りの友達に指示を出していた。	動物じゃんけんでは、じゃんけんのポーズを考え理由も一緒に発表していた。	2年生との集会では、プログラムのアイデアを出していた。

学級全体	自分の思いをしっかりと伝える子もいるが、自分の思いを言えない子も多い。	1年生を迎える会では、日程が入学式の翌日ということで、練習する時間があまりなかったため、全校児童の前で緊張して自己紹介できない児童がいた。	2年生との学校巡りでは、グループの中に知っている2年生がいたのでいろいろと話したり、手をつないだりして楽しく活動していた。	友達が書いている学校探検カードを見て、質問していた。	学校探検では、その場所になぜ行きたいのか理由をつけて発表していた。	6年生との交流では、多くの児童が6年生に甘え、抱っこやおんぶをしてもらってスキンシップを取ったり、いろんなことを質問したりしていた。	2年生との集会では、活動を振り返るとき、楽しかったことを具体的な内容を挙げて発表していた。
------	-------------------------------------	---	---	----------------------------	-----------------------------------	--	---

(カ) 考察

スタートカリキュラムを全時間実施し、このスタートカリキュラムが有効であると検証できたことは以下の点からである。

- a 児童が主体的な活動を行うことにより最後まで意欲的に取り組むことができた。
- b 自然な形で先生や友達とコミュニケーションを取りながらかかわることで、自分や友達のよさに気付くことができた。
- c 体験した後の振り返り活動を繰り返し行い自分の思いや願いを伝えることにより、表現力が身に付いた。
- d 活動にゆとりをもたせた時間設定のため、教師にとっても余裕が生まれ、見通しをもった授業の展開ができた。
- e 保護者に対して活動時の様子を担任から知らせたり、児童が家庭で楽しかったことを話したりすることから、安心感をもつことができた。

イ 保育所との交流の検証授業の実施（対象：A小学校第1学年、C保育所年長児）

B市の保育所・幼稚園と小学校との交流についてのアンケート調査の結果をもとに互惠性のある交流活動案を作成し、効果的な幼児と小学生の交流活動の検証授業を行い考察した。[別紙資料2参照]

(ア) 交流活動について

a 互惠性のある効果的な交流について

昨年度の研究で、保幼小の接続期において互惠性のある効果的な交流活動として次の4点を挙げている。検証の結果、有効であったことが認められたので、今年度の交流もこの設定で検証を行うようにする。

- ① 対象：1年生と年長児
- ② 回数：1年間に3回（9月、11月、2月）
- ③ 形態：1年生と年長児のペア
- ④ 内容：継続性をもたせた内容

b 交流活動の題材決定の要素について

昨年度の研究で交流活動を決定する要素として、次の①～⑥の6項目を挙げている。今年度は、B市におけるアンケート結果も考慮し、交流の目的を年長児と1年生が親しみをもってかかわることに重点を置いた。グループで話し合ったり、絵や文字を使ってコミュニケーションを取ったりして、お互いが高まり合える関係になるようにしたいと考え、⑦を付け加えた。

- ① 年長児が保育所での経験を生かすことができ、年間指導計画に位置付けることができるもの
- ② 年長児も挑戦できるもの
- ③ 1年生が教えながら、年長児と協力してできるもの
- ④ 1年生の教科の学習や生活に関連するもの

- ⑤ 季節に合っているもの（秋から冬にかけて）
- ⑥ 年長児と1年生と一緒に活動できるもの
- ⑦ グループでコミュニケーションを取る必要があるもの

c 交流の内容

学校や児童・年長児の実態を考慮に入れ、以下のように交流内容を計画した。

	1回目にこにこ交流をしよう 出会う	2回目にこにこ交流をしよう 慣れる	3回目 1日入学で交流をしよう 深める
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・1年生が保育所を訪問する ・小学校の運動会のお知らせをする ・グループを作る ・名刺を渡したり、名札を作ったりする ・じゃんけん遊びをする 	<ul style="list-style-type: none"> ・年長児が小学校を訪問する ・リズム遊びをする ・昔遊びで遊ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ・年長児が小学校を訪問する（1日入学） ・1年生が学習の発表をする ・おにごっこをする ・昔遊びをする ・学校巡りをする

(i) 検証授業について

a 検証授業の概要

(a) 対象者

A小学校 第1学年 16名・C保育所 年長児 33名

(b) 実施日

平成23年11月16日・11月24日・11月29日・12月2日

(c) 単元名

「こにここうりゅう 大きくせん!!」

(d) 交流活動の題材について

検証授業の2回目の交流では、グループで話し合いをしながら活動を進める必要がある「体を使った昔遊び」を考えた。グループで一定の時間、5つの昔遊びコーナーで遊ぶことができるという活動である。グループで活動するにあたり、グループで話し合ったり、会話をしながら遊んだりできると考えた。

この活動は、保育所が年間を通してなわとびの活動を行っていることや年長児は1月に昔遊びを行っていること、1年生にも1月に生活科の中で地域の方から昔遊びを教えてもらう活動を設定していることなどから、お互いの年間指導計画に位置付けることができると考えた。また、5つの遊びは、保育所で遊んだ経験のある遊びだけではなく、初めて挑戦する遊びも取り入れている。さらに、年長児と一緒に遊べるように1年生なりにルールを考え、休み時間などにも上級生を誘って一緒に遊んだり、年長児も保育所での遊びが広がっていくことをねらっている。

b 検証授業の分析

(a) 検証授業（活動グループは3名又は4名）

	主な活動内容	成果	課題
第1時 (11/16)	(交流の事前授業) 年長児と一緒にできる昔遊びの楽しい遊び方を考える。	<ul style="list-style-type: none"> ○この遊びをしたい（ケンパ跳び等）という強い気持ちがあるので、遊びの工夫や注意点等を考えることができた。 ○振り返りのビデオを見ることで、様々なことを思い出すことができ、後で遊び方を考えるときに役立っていた。 ○グループで集まってかかわりながら考えていたため、子どもたちがお互いに意見を出したり教え合ったりしていた。 ○1年生が年長児をイメージして計画しようとしていた。グループの年長児を意識できている。 	▲グループの話し合いでは、一人一人のカードに全員が同じ意見を書いていたので、話し合っただけで違うことを書くと良かった。

第2時 (11/24)	(交流の事前授業) 交流の準備をする。	○年長児に分かるように発表を工夫している他のグループの方法(覚えて発表する、実際にやって見せる等)を真似て、すぐに取り入れようとする姿が見られた。 ○児童の熱心な練習態度から、年長児に楽しんでもらいたいという思いが伝わってきた。	▲発表練習に時間がかかり、ポスターなどを作る時間がなかった。 ▲全15時間の単元だが、この授業後もう1時間取っている。それも含めて16時間扱いにしたほうが良かった。
第3時 (11/29)	(年長児との交流) 歌やリズム遊びをする。 グループごとに昔遊びで遊ぶ。	○1回目の交流からグループを固定していたので、グループのメンバーのことを覚えており、すぐにグループで集まることができた。 ○導入には子どもたちが保育所で経験した歌やリズム遊びを取り入れたので、お互いの緊張感が取れ、どの子どもも表情が明るくなった。 ○グループで集まってどんな遊びをするのか、遊び方などを話しながら活動していた。 ○1年生が遊び方を説明したが、保育所では先生が説明を行うので、年長児にとっては、1年生に対して憧れの気持ちをもつことができた。	▲活動を1時間10分と設定していたが、子どもたちの様子を見て50分にした。全部を含めて、1時間程度が良い。
第4時 (12/2)	(交流の事後授業) 交流を振り返り、自分、友達、年長児ががんばっていたことを思い出す。 グループの年長児には、がんばっていたことを手紙に書く。	○ビデオの中で、見る観点を絞ったことで児童らにも具体的に見るポイントが分かり、次の活動につながることであった。 ○年長児の具体的ながんばりを見つけることで、自分自身を振り返ることもなり、児童の自信につながった。	▲児童1人が年長児2人分の手紙を書くことになるので、もう少し書く時間を確保する必要があった。

(b) 学級や児童の変容について

	第1時	第2時	第3時	交流後の感想	第4時 年長児に宛てた手紙
A児	楽しい遊び方のアイデアをすぐに考え、いくつも遊びのカードに書いていた。	年長児がもっと楽しくなるようにグループに遊び方を具体的に提案していた。	自分からグループの年長児に遊びたいコーナーを聞くなど積極的に話しかけていた。	ぼくは、㊦ちゃんと㊧ちゃんと紙風船が4回できました。順番こにできました。ぼくも、㊦ちゃんと㊧ちゃんの名前を覚えました。	㊦ちゃんへケンパを続けてできてすごいね。 ㊧ちゃんへ紙風船で優しくポンポンできていたね。
B児	楽しい遊び方のアイデアがなかなか浮かばなかったが、グループの友達の意見を聞いたので理解できた。	グループで話し合っていると自分が発表するところが決まると、一人で何度も練習して覚えようとしていた。	グループの年長児が遊び方がわからず困っていると、年長児のすぐ隣へ行き丁寧に分かるまで教えてあげていた。	㊨くんと㊩くんとまた、一緒に遊べてうれしかったです。紙風船のとき、㊨くんと㊩くんが力を合わせてやったのでとてもうれしかったです。	㊨くんへ大波小波上手だったね。また、遊ぼうね。 ㊩くんへ難しいコーナーへ行けて良かったね。すごく上手だったよ。

C 児	楽しいアイデアがたくさん浮かんできたが、どれをカードに書いたらいいのか困って、考え込んでいた。	グループの友達が考えた楽しい遊び方を聞き、それを「こうしたらどうか」とさらに遊び方を広げようとしていた。	遊びコーナーを移動するときには、グループの年長児の手をつないで離れ離れにならないように気にしながら移動していた。	私は、㊦ちゃんと㊧くんとまた交流ができてうれしかったです。わたしは、㊦ちゃんと話をして楽しかったことを書きました。紙風船を3回落としたけど、㊦ちゃんたちとやれたから楽しかったです。	㊧くんへ ㊧くんは、ケンパの難しいコースを1回でできたね。 ㊦ちゃんへ にこにこ交流は楽しかった？私は楽しかったよ。ケンパとびもいろはにこんぺいとうも紙風船もゴム跳びも大波小波も私は楽しかったよ。
学 級 全 体	グループ全員が同じ意見を書いたり、自分の意見がもてなかったりした児童がいたが、他のグループの意見を聞き、修正することができた。	遊び方の説明の練習では、他のグループの練習を見て、いいところを自分たちのグループに取り入れ、さらに良いものにしてようとしていた。	年長児に優しく遊び方を教えてあげたり、年長児を優先して遊ばせてあげたりしていた。	年長児と一緒に遊んだ遊びのことを具体的に書いていた。楽しかったことを絵を使って表現していた。紙風船のことを書いている児童が多かった。	グループの年長児ががんばっていた姿を思い出し、それを手紙に書いてあげたり、相手によって内容を変えたりするなどしていた。

(c) 検証授業後の協議 (12月26日)

○年長児担任より

- ・この交流が1年生の生活科とのつながりがあるものだと理解できた。
- ・年長児に「1年生と2回目のにこにこ交流するよ」と知らせたときから1年生に会うことを楽しみにしていた。
- ・保育園で日頃からやっているリズム遊びから入ったので、自然に活動に入ることができた。
- ・保育所で体験したことのない遊び（紙風船、いろはにこんぺいとう、ゴム跳び）ができた。
- ・このような交流をすんなり楽しめる子は、入学後も心配がないが、入学を不安に思っている子はこういう経験を積んで入学するといいのではないか。
- ・交流後、年長児一人一人がもらった手紙を大切に喜んで読んでいた。昨年度の年長児担任も読むことができ、保育士として卒園後の子どもたちの様子を知ることができたので、交流はいい機会だった。

○園長先生より

- ・年長児は、言葉で説明する1年生に憧れる。保育所では、ゲームの説明や指示は先生がしていたので、1年生になるとこういうこともできるのかと感心する。決められた分ではなく、自分たちで考えた文で発表していることが伝わって成長を感じる。

○1年担任より

- ・普段の生活でも、友達が困っていると手を差し伸べられるようになっている。
- ・交流の準備をする、手紙を書くなど全ての活動を主体的にすることができるのは言うまでもなく活動も楽しむことができた。
- ・交流後のお手紙を持っていくときは張り切っていた。
- ・この交流が来年、1年生、2年生の関係になってもつながって欲しい。
- ・今から3回目の1日入学を楽しみにしている。

ウ 教職員の協力体制（対象：A小学校教職員、C保育所職員）

A小学校の教職員に対して保幼小の連携教育についての意識調査を実施した。アンケート調査には連携の基本的なものを18項目設定し、全てから回答を得た。アンケート調査の実施前、管理職には教職員が連携に対してどのような意識をもっているのか推測してもらい、その結果と調査結果と比較分析を行い、管理職と今後のA小学校での連携教育の在り方を検討した。教職員のアンケートから「できる」の回答と管理職の推測が一致したものを連携に取り組みやすいものと認識し、検討の結果、小学校の教職員と保育所の職員が参加しての合同研修を2回実施するようになった。

(ア) 教職員の合同研修会

検証授業の中の幼児との交流活動の前時をA小学校での研究授業とし、校内研修に位置付けることにした。

a 実施日

11月16日

b 会場

授業：1年教室

研究協議：C保育所

c 参加者

A小学校教職員、C保育所保育士、B市教育委員会、学校評価委員 合計18名

d 研究協議

研究授業後、保育所へ行き、日常の保育の様子などを参観し、その後、研究協議を行った。協議では、1年生の取組の成果や連携教育を実施する必要性について共通理解を図った。

○今までの取組について

(1年担任より)

- ・1回目の交流では、年長児と一緒に活動できた喜びを得ることができた。
- ・この保育所出身の児童は積極的に話していたが、この保育所出身ではない児童は、当初、恥ずかしがっていた。しかし、後半のじゃんけんゲームになると、年長児と1年生の間の隔たりがなくなり、どの子も楽しく活動していた。
- ・2回目の交流に対する意欲はある。

○参観者より

- ・1年生が年長児をイメージして遊び方を計画しようとしていた。自分のグループの年長児を意識している。
- ・相手意識をもった活動なので意欲が高まる。
- ・小学校も保育所の子どもの発達や実態等について理解をしていく必要がある。

保育所・幼稚園との連携教育についてのアンケート結果～A小学校教職員対象～						
今後、保育所・幼稚園と連携をするにあたり、どのようなことができると思われますか。できるもの○(今までやっているものも含む) 校内体制や時間などを調整したらできるもの△ できないと思われるもの× を記入してください。						
【☆は校長、◇は教頭が多数の意見が出ると推測したところを表している】						
	項目	調査回	○	△	×	無回答
子どもの交流	1 ねらいを明確にした幼児と児童の交流	1	8☆◇	2	0	1
		2	7	3	0	1
	2 子どもや保育者、教師がお互いの行事に参加例)夕涼み会、バザー等	1	2☆◇	6	2	1
		2	4	4	1	2
教職員の相互理解	3 生活科や総合的な学習の時間、社会科等での地域探検	1	8☆	2◇	0	1
		2	6	5	0	0
	4 休み時間での自由遊び	1	5☆◇	3	0	3
		2	3	5	1	2
工夫 編成・課程 指導方法の	5 相互に職場体験	1	4◇	6☆	0	1
		2	3	5	0	3
	6 授業や保育の参観	1	6◇	4☆	0	1
		2	6	5	0	0
	7 日常生活の様子を参観例)給食・掃除等	1	8☆◇	3	0	0
連絡体制の整備	8 入り込み保育や出前授業例)勉強、歌の指導等	1	1	5☆◇	3	2
		2	1	5	2	3
	9 教職員の合同研修会	1	8☆◇	2	0	1
		2	5	5	0	1
保護者への発信	10 年間指導計画に位置付け	1	5◇	3☆	0	3
		2	3	7	0	1
	11 保育所・幼稚園の指導方法等を取り入れた低学年の指導の工夫	1	5◇	2☆	1	3
		2	4	5	1	1
	12 小学校入学前の児童の実態の情報交換	1	11☆◇	0	0	0
保護者への発信		2	10	1	0	0
	13 園だより・学校だよりで情報交換	1	11☆◇	0	0	0
		2	8	2	0	1
	14 保育所児童保育要録・幼稚園幼児指導要録の活用	1	6☆	2◇	1	2
		2	7	0	1	3
保護者への発信	15 小学校へ進学を意識した連絡会	1	8◇	1	0	2
		2	10	1	0	0
	16 通信などでのお知らせをする	1	11☆◇	0	0	0
		2	8	1	0	2
保護者への発信	17 ボランティア等で協力してもらおう	1	5◇	2☆	2	2
		2	6	2	0	3
	18 相互の保護者に行事に参加してもらおう	1	2◇	5☆	2	2
		2	2	5	0	4

図2 教職員の連携教育に対する意識調査

(イ) 保育所と小学校の情報交換会

幼児と児童の実態や指導の在り方について相互理解を深めるため、保育所と小学校が子どもの育ちや学びについての情報交換会を実施した。

a 実施日

1月30日

b 場所

C保育所

c 参加者

A小学校教員、C保育所保育士等 合計7名

d 研究協議の内容

- ・今年度の保育所での取組（保育の内容、支援の方法や指導の仕方）
- ・今年度入学した児童の実態、取組
- ・今後の課題（小学校でも引き続き取り組む必要がある課題）

4 研究の成果と課題

(1) スタートカリキュラムについて

ア 成果

スタートカリキュラムの中に児童の発達に即した幼児教育の学びや良さを生かした活動を取り入れているので、全ての活動において児童が主体的に取り組めるものになった。そのことにより、児童が安心感をもって意欲的に活動ができ、活動の内容も充実することができた。また、教師にもゆとりが生まれ、児童に十分にかかわることができ、多様な学習展開ができた。

コミュニケーションを取りながら教師や友達とかかわることで、4月の早い時期から新しい先生や友達に慣れることができた。また、開放された空間で楽しく自分を表現しながら活動する中で、自分や友達の良さに気付くことができた。

学習後の振り返り活動を繰り返すことにより、自分の思いや願いを表現する楽しさや喜びを感じることができた。また、授業の流れが身に付き、教科の学習にも生かすことができた。

このようなことからスタートカリキュラムでは、すべての児童がより良い方向に成長できたと考えられ、保育所・幼稚園から小学校への円滑な接続に有効であったといえる。

イ 課題

この作成されたスタートカリキュラムを基本にし、学校や児童の実態に合わせて学校独自のスタートカリキュラムを実施していくことが重要である。今年度、スタートカリキュラムに他の教職員がかかわることで、教職員にも1年生を複数の目で見るという意識ができたと考えられる。スタートカリキュラムの実施を積み重ね、さらにより良いものに改善していくことが大切である。また、スタートカリキュラムを継続して実施していくためには、他の教職員の協力体制も必要である。

(2) 幼児との交流活動について

ア 成果

今年度は、スタートカリキュラムや幼児との交流を年間指導計画に位置付け、実施した。[別紙資料3参照]

交流活動では、1年生と年長児とのペアでの組み合わせを生かして、交流の題材や単元構成を工夫したことにより、自然な形で1年生と年長児がかかわることができた。お互いの年齢が近いので年長児は小学生や1年生の姿を具体的にイメージしやすく、小学校生活に期待を寄せたり、安心感をもったりすることができた。また、1年生は自分の成長を感じたり、年長児に対して思いやりの心をもったりしながら接することができた。交流は2か月程度の間隔を取り3回行ったことで、活動する、振り返る、次へ生かすの体験を重ね、活動の質を高めることができた。さらに、そのことで、次の交流への意欲やかかわりが深まることにつながった。

また、教師にとっても、交流についての打ち合わせの時間が確保でき、お互いの意見や情報を交換できたり、子どもたちの変容を次の活動へ生かしたりすることができた。小学校では、入学前から新入児の実態も把握でき、保育所では、卒園した子どもたちの成長も見ることもできた。年長児担任が保護者に向けて交流の成果を伝えることで、保護者の入学への不安が和らげることができた。

このようなことから、互惠性をもった幼児との交流活動を行うことで1年生や年長児だけではなく、教師や保護者にとっても成果が表れた。

イ 課題

今後も保育所と小学校が共通理解を図り継続的に交流を実施していくためには、年間指導計画に位置付け継続的に実施していくことが重要である。互惠性のある交流活動を行うためにも、保育所と小学校との交流活動に対するねらいを明確にし、双方の子どもの実態を把握したり、お互いが意見を出し合ったりしていく必要がある。そうすることで、子どもたちもより良い方向に変容し、それぞれのよさもさらに見えてくると思われる。

(3) 教職員の協力体制について

ア 成果

教職員の連携に対する意識調査の結果から管理職と検討して、保育所との合同研修会を2回実施することができた。

1回目の合同研修会では、1年生と保育所との交流の前時を校内研修に位置付け、全教職員や保育所の先生方に参加してもらうことができた。小学校や保育所の教職員が1年生の授業や保育所での保育を参観することで、お互いの子どもたちの学びや発達等を知ることができた。また、今までの1年生の取組や連携教育についての協議を行い、連携教育についての共通理解を図ることができた。

2回目の教育内容の情報交換会では、小学校と保育所が参加して具体的な子どもの姿から保育所や小学校の育ちや学びについての情報交換を実施し、それぞれが相互理解を深めることができた。子どもたちの発達の連続性を捉え、双方が協力して取り組む必要がある課題も出され、今後も継続して実施する必要性を感じた。

イ 課題

幼児教育の理解を教職員全体に広めていくために、保育所との合同研修会へ全教職員が参加できる体制づくりが必要である。そのためには、年間の研修計画に位置付け、計画的に取り組んでいくことが考えられる。今後、スタートカリキュラムや幼児との互惠性をもった交流活動の実践を重ねていく上でも、担当がいなくなると続かなくなるのではなく、誰もが担当になってでもできるような体制づくりが必要である。そのためには管理職の理解が重要となる。これらの取組から、全教職員にも連携に対する意識が生まれ、円滑な保幼小の接続ができると考えられる。

*掲載物使用承諾済

【参考文献】

- ・仙台市教育委員会『「スタートカリキュラム」のすべて—仙台市発信・幼小連携の新しい視点—』ぎょうせい、2010
- ・尊田史、尾中映里「保幼小の連携教育のカリキュラム作成に関する研究」高知県教育センター研究報告書、平成22年
- ・文部科学省、厚生労働省『保育所や幼稚園等と小学校における連携事例集』平成21年
- ・国立教育政策研究所『評価方法等の工夫改善のための参考資料』平成23年3月
- ・文部科学省、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議『幼児期の小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)』平成22年
- ・葉養正明『教職研修2004 2月号増刊 管理職のための“学校改革”プロジェクト 学校を活性化する組織マネジメント』教育開発研究所、平成16年
- ・木岡一明『ステップ・アップ 学校組織マネジメント』第一法規、平成19年

別紙資料 2

第1学年 生活科学習活動案

1 単元名 「にこにここうりゅう 大きくせん!!」

2 単元について

今日、保育所・幼稚園と小学校との接続期には、様々な課題がある。しかし、幼児の発達や学びを連続したものと捉え、幼児教育から小学校教育へと円滑な移行をする必要がある。保幼小の円滑な接続について今年度から実施されている小学校学習指導要領解説生活編では、「幼児教育からの小学校への円滑な接続を図る一環として、児童が自らの成長を実感できるよう、低学年の児童が幼児と一緒に学習活動を行うことなどに配慮することが求められている」とあり、具体的な連携の大切さに関することが明記されている。積極的に保育所・幼稚園と小学校が交流することで、幼児や小学生ともにそれぞれの成果が得られると考えられる。平成22年度教育センター研究生が先行研究として保育所・幼稚園の年長児や小学校第1学年の担任をされていた先生方に実施したアンケートによると、保育所・幼稚園と小学校との交流回数は3回がよいという結果になった。今年度、B市の先生方に実施したアンケートでは、交流回数は2回がよいという回答が多かった。そこで、3学期に1日入学を行うこと等を考慮し、今年度は、近隣の保育所の年長児と第1学年の児童が3回の互惠性のある交流を行い、ともに学び合えるような活動を展開させるようにした。

昨年度まで本校と保育所との交流は、低学年が主で、生活科や国語科で保育所を訪問し、調べたことを発表したり一緒に遊んだりしていた。保育所からは幼児が来校して、休み時間に夕涼み会やバザーのお知らせをしたり、次年度入学する年長児が運動会に参加したりしていた。また、B市へ新しく赴任してきた教員が保育所で職場体験を行ってきた。しかし、まだ、相互が高まり合える交流にまでは至っていない。

本単元では、保育所と小学校が話し合いをもち、相互に目的をもった互惠性のある交流活動を行うようにする。1年生にとっては、年下の幼児と接することで、自分の成長を感じたり、自分や友達のよさに気付いたりできる。年長児にとっても、児童や小学校に親しみがもて、児童に憧れの気持ちをもったり、小学校生活に期待を寄せたりできる。そういった交流を行うことで、お互いが高まり合える活動になると考える。まず、1回目の交流では、小学校の運動会のお知らせをするため、保育所を訪問する。お知らせをした後、小グループになり、名刺を渡したり、名札を作ったりしてお互いの名前を呼びあえる関係づくりを行う。今後、交流を続けていくにあたり、グループは固定化し、相手に親しみを感じ、安心感をもって活動を行っていきけるようする。2回目の交流では、1回目の交流と同じグループで体を使った昔遊びをする。自分たちが考えたルールで遊ぶことにより、思いやりの心がもてたり年長児の喜ぶ姿から自信につながったりすると考えられる。3回目の交流では、来年度入学してくる新入生に小学校での1年間のことを紹介することとし、自分たちの1年間を振り返るようにする。そうすることで、自分ができるようになったことや役割が増えたことに気づき、自分の成長を感じることができる。また、年長児には、学校の様子を知ってもらい、入学時の不安や戸惑いをできるだけ少なくなるようにしたい。

単元を通して、常に目的意識をもたせ、活動内容を自分たちで考えることにより意欲的に学ぶことができるようにしたい。また、友達や年長児に対し、分かりやすく自分の思いや願いを話す中で、伝わる楽しさを味わい、コミュニケーション能力を育てていきたい。

本単元は、主として、「小学校学習指導要領 生活 内容(8)」を受けている。

3 単元の目標

年長児と交流する活動を通して、年長児や友達とかかわることの楽しさや自分にできることが増えたことが分かり、親しみをもって年長児と接することができるようにする。

4 単元の評価規準

	生活への関心・意欲・態度	活動や体験についての思考・表現	身近な環境や自分についての気付き
単元の評価規準	年長児や友達とのかかわりに関心を持ち、進んで交流したり、適切に接したりしようとしている。	年長児と交流し、適切に接することについて、相手の立場や場に応じた行動を考えたり、分かりやすい伝え方を工夫したりして表現している。	年長児や友達に自分の思いを伝え合うことの楽しさが分かり、それらができるようになった自分に気付いている。
学習活動（小単元）における評価規準	一 1回目のにこにこ交流をしよう	①交流を楽しみにして、友達と一緒に作品をつくらうとしている。 ②年長児に関心を持ち、親しみをもってかかわろうとしている。	①交流したことを振り返り、めあてを決めている。
	二 2回目のにこにこ交流をしよう		②年長児に応じて活動を工夫したりルールを考えたりしている。 ③遊びのルールを決めたり活動の準備をしたりしている。 ④遊び方を工夫したり、年長児とかかわって遊んだりしたことを振り返り、自分なりの方法で表現している。
	三 1日入学で交流をしよう	③年長児や友達と楽しく伝え合い、繰り返し交流しようとしている。	⑤これまでの体験をもとに、比べたり、例えたりして、分かりやすい伝え方を工夫している。
			①年長児に親しみが増したり、適切に接したりすることができるようになった自分に気付いている。 ②自分が大きくなったこと、自分でできるようになったこと、役割が増えたことなどに気付いている。 ③自分の成長に希望を持ち、進級することへの期待感を表している。

5 指導と評価の計画（全15時間）

小単元名	時	主な活動内容（時数）	評価				
			関	思	気	小単元の評価規準	評価方法
一 1 回 目 の こ こ 交 流 を し よ う	1	○お知らせの内容を決め、発表の準備や練習をする。（1）	○			関①：交流を楽しみにして、友達と一緒に作品を作ろうとしている。	発言、チラシ、名刺カード、名札
	2	○保育所との1回目の「ここにこ交流」をする。（2） ・小学校の運動会のお知らせをする。 ・グループを作る。 ・名刺を渡したり、名札を作ったりする。 ・じゃんけん遊びをする。	○			関②：年長児に関心を持ち、親しみをもってかかわろうとしている。	行動観察
	3	○交流の振り返りをする。（1）		○		思①：交流したことを振り返り、めあてを決めている。	発言、振り返りシート
二 2 回 目 の こ こ 交 流 を し よ う	1	○交流内容を考え、計画を立てたり、準備をしたりする。（2）		○		思②：年長児に応じて活動を工夫したり、ルールを考えたりしている。 思③：遊びのルールを決めたり活動の準備をしたりしている。	発言、カード、行動観察、ポスター、遊びコーナーの準備物
	2	○保育所との2回目の「ここにこ交流」をする。（2） ・リズム遊びをする。 ・昔遊びで遊ぶ。			○	気①：年長児に親しみが増したり、適切に接したりすることができるようになった自分に気付いている。	行動観察、ラリーシート
	3	○交流の振り返りをする。 ・ペアの年長児に手紙を書く。（1）		○		思④：遊び方を工夫したり、年長児とかかわって遊んだりしたことを振り返り、自分なりの方法で表現している。	発言、年長児への手紙
三 1 日 入 学 で 交 流 を し よ う	1	○1日入学で年長さんを迎える内容を考え、計画を立てたり準備をしたりする。（3）	○		○	気②：自分が大きくなったこと、自分でできるようになったこと、役割が増えたことなどに気付いている。 関③：年長児や友達と楽しく伝え合い、繰り返し交流しようとしている。	発言、計画書、行動観察
	2	○1日入学で交流をする。 ・学習の発表をする。 ・おにごっこをする。 ・昔遊びをする。 ・学校巡りをする。（2）		○		思⑤：これまでの体験をもとに、比べたり、例えたりして、分かりやすい伝え方を工夫している。	発表、行動観察
	3	○1日入学を振り返る。（1）			○	気③：自分の成長に希望を持ち、進級することへの期待感を表している。	発言、生活科シート

第1学年・年長児交流活動案

○ 3、4時間目（7、8/15）

1 単元名 にこにここうりゅう だいさくせん!!

2 本時の目標（1年）

- ・年長児に尋ねたり応答したりしながらグループの意見をまとめることができる。（コミュニケーション）
- ・体を十分動かし、友達と一緒に遊びを進める楽しさを味わうことができる。（活動）

2 ねらい(年長児)

- ・1年生との会話を楽しむ。（コミュニケーション）
- ・リズムや昔遊びを友達や1年生と一緒にする。（活動）

3 評価規準

年長児に親しみが増したり、適切に接したりすることができるようになった自分に気付いている。

4 準備物

（1年生）

（教師）

- ・紙風船 ・フラットリング ・ゴム跳び用のゴム ・なわとび ・紹介ポスター ・名札 ・ラリーカード ・シール ・ピアノ ・CDデッキ

平成23年11月29日(火)9:30～11:30

場所 A小学校 体育館

1年 児童数 16名

年長児 園児数 33名

支援者 T1 押川 朝子 T2

年長組担任 T3 T4

時間	活動の流れ	環境構成	◎T1の支援	◆1年生の予想される姿	◆年長児の予想される姿	◎T2～T4の年長児への支援 ○T2～T4の1年生への支援 ●T2～T4の年長児・1年生への支援 【評価方法】★
9:30	① 年長児が到着する。 ・体育館へ集合 ② 前回と同じ活動グループの3人組になる。	前 ○○○○○○○ ○○○ ○○○○○ グループ	◎ 遊びコーナーの準備物がそろっているか確認する。 ◎ 1年生が年長児を誘って3人組になるようにする。 ◎ グループになったら3人で手をつないで座るようにさせる。	◆ 遊びコーナーの準備をする。 ◆ 名札を付けておく。 ◆ 同じグループの年長児の名前を呼んであげて3人組になる。 ◆ 座る場所を決め、3人で手をつないで座る。	◆ 名札を付けておく。 ◆ 名前を呼ばれたら3人組になる。 ◆ 3人で手をつないで座る。	● 活動前から名札を付けることにより、交流への意欲を高める。 ● すべての児童や年長児がグループになることができたか確認する。 ○ 大きな声で年長児を呼べない児童には、一緒に呼んであげるようにする。 ● 3人組の座るスペースを確保できるように支援する。
9:35	③ 初めのあいさつをする。		◎ 本時の流れとめあての説明をする。	◆ 司会を1年生が行う。 ◆ 初めの言葉を言う。(代表)	◆ 1年生のあいさつを聞く。	● 1年生や年長児に久しぶりに会う喜びに共感する。
9:40	④ リズム遊びをする。 ・トンボ ・アヒル ・ウサギ	ピアノ 前 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	◎ リズム遊びの約束事を確認する。 ・移動してもいい場所を確認する。 ・友達とぶつからないように行う。	◆ 音楽に合わせて体を自由に動かす。	◆ 音楽に合わせて体を自由に動かす。	● すべての児童や年長児ができていないか確認する。 ● できない児童がいたら誘って、一緒に行うようにする。 ● 安全に活動できているか確認する。
9:50	⑤ 体育館で昔遊びをする。 ・紙風船 ・ケンパ ・大波小波 ・ゴム跳び ・いろはにこんぺいとう	前 紙風船 大波小波 □ □ ケンパ □ ゴム跳び いろはに こんぺいとう □ □	◎ 昔遊びの約束事について確認する。 ・遊びコーナーのルールを守る。 ・名札の裏に行ったコーナーのシールを貼ようにする。 ・音楽が鳴ったら別のコーナーへ話し合っていくようにする。(10分ごと)最後の10分にもう一度1つのコーナーに行くことができる。 10分ごとに音楽をかけ、次のコーナーに行くように促す。	◆ それぞれの遊びコーナー担当が前に出てきて、遊び方を説明する。 ・紙風船 ・ケンパ ・大波小波 ・ゴム跳び ・いろはにこんぺいとう ◆ グループで話し合って、遊ぶコーナーを決める。 ◆ ルールを教えてあげたり、遊ぶコツを教えてあげたりする。	◆ どのコーナーで遊びたいか1年生の説明を聞く。 ◆ グループで話し合って、遊ぶコーナーを決める。 ◆ ルールを守って遊んだり、友達と競い合ったりして楽しく遊ぶ。 ◆ 終了の合図が鳴ったら、グループで集まって座る。	● 遊びが進められるように見守ったり、必要に応じて言葉がけをしたりする。 ● ルールに応じて活動しているか確認し、安全面に留意する。 ○ 年長児とうまく話ができない児童には、一緒に話ができるように支援する。 ● どのコーナーへ行くのか話し合いがまとまらないグループには、グループに加わり、一緒に考えていくようにする。 ◎ うまく遊べていない年長児には、理由を聞き、適切に支援する。 ★ 年長児に親しみが増したり、適切に接したりすることができるようになった自分に気付いている。【行動観察】
11:00	⑥ 終わりのあいさつをする。	前 ○○○○○○○ ○○○ ○○○○○ グループ ごとに座る	◎ 今日の評価や次回の交流について話す。	◆ 終わりの言葉を言う。(代表) ◆ 交流して楽しかったことやうれしかったことを発表する。	◆ 交流して楽しかったことやうれしかったことを発表する。	◎ 年長児にあいさつのタイミングを助言する。 ● 1年生、年長児に対して今日の活動の評価をする。
11:20	⑦ お別れをする。		◎ 小学校への入学に期待を持たせるようにする。	◆ 年長児のお見送りをする。	◆ 手を振りながら帰る。	● 次へ期待をもちながら、暖かい雰囲気でお別れできるようにする。

別紙資料 3
年間指導計画(生活科)

学期	月	第1学年	
		みんな なかよし	
1 学期	4月	スタートカリキュラム 「はじめまして」全25時間(生活7時間) ※国6時間 算1時間 音2時間 図2時間 体3時間 道2時間 学2時間	はるとともだち 6時間 ・先生や友達と一緒に遊んだり学んだりして、生活していく楽しさを味わうことができるようにする。 内容(3)(4)(5)(6)
	5月	スタートカリキュラム 「がっこうだいすき」全16時間(生活3時間) ※国3時間 算2時間 音1時間 図3時間 体1時間 道1時間 学2時間	
		スタートカリキュラム 「みんななかよし」全11時間(生活1時間) ※国4時間 算1時間 音1時間 図1時間 体1時間 道1時間 学1時間	
	6月	いきものとなかよし 9時間 ・生き物に親しみ、生命を大切にすることができるようにする。 内容(7)	
	7月		
2 学期	8月 9月	保育所との交流 「にこにここうりゅう大さくせん!!」 15時間 ・年長児と交流する活動を通して、年長児や友達とかかわることの楽しさや自分にできることが増えたことが分かり、親しみをもって年長児と接することができるようにする。 内容(3)(8)(9)	あきともだち 14時間 ・季節の変化を味わいながら、木の実や葉で遊んだり、秋を探したりして、自然のよさを自分なりに感じ取ろうとしている。 内容(3)(4)(5)
	10月		
	11月	いっしょがいいね 9時間 ・家族のことや自分でできるようになったことなどについて考え、自分の役割を積極的に果たそうとする意欲をもつことができるようにする。 内容(2)(8)	
	12月		
3 学期	1月	もうすぐ2年生 7時間 ・入学してから1年間を振り返り、1年間にあった出来事やがんばったことなどを思い出し、自分の成長を見つけることができるようにする。	ふゆともだち 11時間 ・冬に自然を生かした遊びや昔ながらの遊びに関心を持ち、冬の寒さに負けずに元気に生活ができるようにする。 内容(3)(4)(5)
	2月		
	3月		
		総時数 102時間	

※スタートカリキュラムは、1時間ごとの指導案あり